

高橋友子著

『捨児たちのルネッサンス』

——一五世紀イタリアの捨児養育院と都市・農村——

坂上 政美

本書は第三回マルコ・ポーロ賞を受賞した注目作であり、一五世紀フィレンツェの捨児養育院の設立から同世紀末までの発展を通して、フィレンツェ上層市民と捨児という社会の周縁集団、中心城市フィレンツェと周辺農村部との支配・従属関係にまで踏み込んだ刺激的な著作である。著者は八九年に渡伊され、以後一貫して捨児というテーマに取り組んでこられた。一九九九年に立命館大学論文博士号を取得され、この学位論文を核に、最新の研究動向を加えて書き下ろされたものが本書である。

経済貧民の増加による社会的貧困の深刻化と、それに対応する、中央政府など世俗権力の手による救貧制度の整備が本格化するのには、ヨーロッパ都市では一六世紀以降のことである。よって、都市の救貧施設に関する本格的な研究は近世を対象としてまず進展した。しかし、近世以降に発展するこのような救貧施設の「世俗化」の端緒が、黒死病の大疫病と経済危機を経た中世末期にあることが広く指摘されるようになったため、今日では、一四・一五世紀における、施設の発展と社会の貧困を巡る諸問題の検討が、政治経済史・思想史・宗教史など様々な文脈からの、中世史にお

ける救貧研究の焦点のひとつとなっている。また一九七〇年以降の社会史の勃興により、政治・社会的マイノリティに対する関心が高まったため、女性や子ども、下層労働者に対する都市の対応や共同体の規範意識をみる鍵として救貧研究が取り上げられるようになったことも、近年における特徴のひとつである。

「はじめに」において示されているとおり、本書はヨーロッパの救貧研究にみられる三つの研究史を踏まえて執筆されている。

第一に、政治史・思想史からみたイタリアにおける捨児施設の形成史、捨児や乳母といった社会的周縁集団に関する研究史、フィレンツェとその支配領域との間の都市と農村関係に関する研究史である。いずれも、イタリア史研究において今日なお活状をみせている重要な研究テーマであるが、捨児や乳母の存在形態と、彼らに対する都市市民の社会的対応の解明により強い関心が向けられていることが、本書の特徴であろう。著者が研究テーマを模索しておられた大学院生当時の七〇年代後半、わが国の西洋史学会は今日のような社会史全盛の状況とはまるで異なり、政治経済史が多勢を占めていた。政治の表舞台から遠く切り離された存在を研究対象としたトレクスラーの研究が、こうした時代にあつていかに新鮮な刺激を与えるものであったかは、「あとがき」で著者により述べられている通りである。この邂逅を通して著者が見つけられたのが、捨児というテーマであり、インノチェンティ捨児養育院の史料であつた。本書は、以後約一〇年に渡る著者の研究の総決算である。また本書脱稿後も女性や農村部に関する研究を著者が一貫して続けておられることを思えば、本書は著者の研究における基調を示したものともいえよう。ところで、社会の周縁

集団を歴史研究のテーマとするとき、非常に限定された枠の中に問題が閉じ込められる危険性が常につきまとう。しかし本捨児養育院の史料は、保存状況、分量共に十分であり、さらにフィレンツェの政治構造、その領域支配構造、女性史など、さまざまな研究分野とリンクさせうる可能性をもった非常に魅力的なものである。海外の研究者に劣らぬ本書の緻密な史料分析は、イタリア史研究者のみならず、中世末期を研究分野とするすべての社会史研究者にとっても刺激となろう。本史料は、一五世紀のフィレンツェ史への多角的アプローチを可能にするものとして、今後注目値するものであろう。

本書の基本構成は次の通りで、第二、第三章には三本の既発表論文が含まれている。まず各章の内容紹介と短評を行い、本書全体に関わる内容については最後の部分で論じてみたい。

はじめに

第一章 インノチエンティ捨児養育院の誕生

第二章 捨児

第三章 乳母

第四章 里子の養育と都市Ⅱ農村関係

第五章 養育院のこどもたち

むすび

補論 一六世紀以降のインノチエンティ捨児養育院

あとがき

第一章 インノチエンティ捨児養育院の誕生

本章ではイタリアにおける慈善施設の起源と研究史がまず概観され、インノチエンティ捨児養育院の運営体制およびその成立過程と社会との関係、そして当時のフィレンツェ市民が有していた慈善観が中心に考察される。本書において主たる考察対象となっているインノチエンティ捨児養育院の一五世紀に関する史料は、保存状況が良好な一四八五年までであり、著者は一四四五―一六四四年をこの施設の創設期、一四六五―一八五年を発展期として設定している。本捨児養育院は、一四一九年絹織物商ギルドにより設立の立案が為され、先に存在していた捨児収容施設であるサン・ガッロとサンタ・マリア・デッラ・スカーラ施療院の機能が、政府の指導により統合され、捨児を専門に収容し保護する施設として一四四五年開設に至っている。

ここで注目されるのは、一五世紀における慈善施設の「世俗化」の動向の背景として、慈善施設の担い手であった都市上層市民の共有する共通善の意識と、瞑想よりも実践を重視する市民的人文主義の興隆、そしてこどもにたいする関心の増大が指摘されている点であろう。慈善施設研究においては、活動内容の先進性、合理性の抽出に強い関心が向けられる傾向があるが、すべての慈善活動はあくまで宗教心に密接に関連した心性によって特徴づけられており、近代における福祉施設とは基本的に異なる社会的意味を与えられていたことは忘れるべきではない。特に共通善という都市支配階層の価値観を取り入れたことが、当時の都市の文化的環境の中に本施設を明確に位置付けるうえで、非常に有効な役

割を果たしているといえるだろう。

しかしまた反面、本施設の設立事情、運営体制を、政治史の中により厳密に位置付ける作業が評者としては欲しかった。一五世紀に広く見受けられる慈善施設の「世俗化」「専門化」の動向の中でも、ギルドが運営主体となるというのはフィレンツェに顕著な特徴であり、これは著者も述べるとおり、ギルドが政治・社会基盤として強い影響力をもっていたフィレンツェ社会の特質を反映したものとも推測できる。他の都市では、フィレンツェほど中層階層が発達せず、ギルドもこれほどに政治力・経済力を持たなかったことに、こうした差異の原因が求められるのであろうか。また近年の研究成果が示すとおり、慈善施設の発展は、貧困層の増加や疫病の流行などの社会的要素のみによって促されるのではなく、都市の政治構造上の変化とも大きな関係を持っている。メデイチ家の権力確立期でもある一五世紀前半に本施設が出現したことの政治・社会的意味を、絹織物商ギルドとの関係から掘り下げることがまた可能だったのではないだろうか。

第二章 捨児

本章は『乳母とこどもたちの記録』と題される史料の中から、約四〇年間に入所した捨児たちについての情報を取り出し、捨児が生み出される原因を、社会的慣習、ジェンダー、世帯構造といった文脈の中で説明することを試みた、本書の中心をなす章である。統計的处理を経て明らかにされた捨児の存在形態は、実に詳細かつ示唆に富んでいる。都市社会が実に多様な社会集団から編成されており、そしてそれらが経済・社会的条件と抵触すること

で生み出される歪みが、都市の「慈善」の名の下に吸収されていく構造の一端を、読者はここで垣間見ることができる。養育院を運営するうえで、母乳の確保を巡って、不可避免的に捨児がつくられていくという指摘は、特に興味深い。たとえ嫡出子であっても、母親が経済的に困窮した場合、自分のこどもを養育院へ預けて母親自身は乳母として同養育院で働くという事例もあったのである。乳の出る女性が商品としての価値を持つという指摘自体はクラピツシユ・ズエベルがすでに指摘しているが、著者はこの問題をさらに掘り下げ、捨児養育院が多数の幼子を擁する以上母乳の確保は不可欠の問題であり、養育院を核に、乳の提供を巡って捨児がどこまでも再生産されていく構造を見出しているのである。動物の乳でこどもを育てることも可とする見解が都市民にも広く受容されるのは近代以降のことであるとすれば（二七七頁）、一五世紀という時代にあつては、このような本来の設立目的と矛盾するような措置が都市部の養育院でとられたことは当然であろう。捨児の根絶よりも捨児への奉仕を重視するという、中世的思想の影響下にある救済施設の機能面での限界と特質をここにみることも可能である。母乳とその提供者である乳母の問題はさらに第三章にも引継がれ、産婆の存在と共に、フィレンツェと他都市、あるいは農村部との間を行き来する人の流れが提示されていく。フィレンツェの領域支配の拡大と発展に伴い、捨児の出生地がその近隣地域から、支配領域の遠方、特に山岳部にまで広がるなどのデータも、トスカナ地方の中心都市であるフィレンツェの領域支配の進展という観点から、興味深いものである。具体的な地方あるいは一村落を対象とし、その世帯構造や経済状況の中でこ

の問題を掘り下げることができればさらに説得力のある論となったのであろうが、史料の制約上やむをえないことも知れない。また同施設に預けられたこどもの中にはのちになって親に引き取られていくものもあり、この養育院が歓迎されないこどもを社会から隔離するための施設ではなく、時には「保育所」や「病院」のような機能も果たしていたことを著者は指摘し、捨児施設の誕生が、社会からの無用のこどもの排除と忘却を促進したというボスウエルの説に異を唱えている。

第三章 乳 母

本章では捨児養育院と乳母との関係から、中・下層市民としての乳母の意味、そして産婆を介しての、養育院と農村部を繋ぐ乳母の雇用システムが考察されていく。乳母の慣習は当時の社会に広くみられたが、上層市民が乳母を雇い入れる側であるのに対し、中・下層市民世帯では、出産を終えた女性が賃金収入を得るために乳母として働く側に立っていた。同捨児養育院では多くの幼子を育てる必要性から、二種類の乳母を確保していたという。ひとつは、貧しい出産間近な女性を施設内に受け入れ、出産のち乳母として雇用する「住み込みの乳母」で、他方は、農村部の小作人の妻のもとに養育院のこどもを預けて育てさせる「里子向け乳母」である。「里子向け乳母」に同養育院が与えた俸給は上層市民家庭の下女の俸給に相当する額であったため、経済的に不安定な階層に属する農村世帯にとってこの収入は魅力であった。それでもなお乳母不足が原因で、施設の発展期にかけて乳母の募集範囲は拡大傾向にあったというが、この過程で、特にカステ

ル・サン・ニッコロが乳母の供給地として養育院と強い繋がりを持つようになったという指摘は注目される。著者の主張するように、この村落とフィレンツェとの間に結ばれた軍事的保護協定が、都市の捨児養育院と農村部の世帯との間にみられる緊密な雇用関係として反映されるとすれば、これはフィレンツェの領域支配構造に社会的視点から光をあてる注目すべき事例となる。しかし著者自身認める通り、養育院側の史料からでは、都市とカステル・サン・ニッコロとの保護・従属関係をこれ以上掘り下げることは困難で、社会史的手法から都市と農村の関係をみるこの限界もまた感じさせる。著者はまた、同養育院の所領や、一円的所領経営を行っていたメディチ家等有力市民の所領内に居住する小作人と養育院の乳母雇用との関係にも言及しているが（一六八、一六九頁）、土地所有者の出自に関してさらに踏み込むことは不可能だったのだろうか。

第四章 里子の養育と都市Ⅱ農村関係

ここでは、前章で疑問として残された、分益小作制を仲立ちとする都市と農村との間の支配従属関係を鮮明なものとするため、インノチェンティ捨児養育院の史料をひとまず離れ、農村の世帯構造や小作人の領主観などが大きく捉えられている。トスカナ地方は例外的に農村研究の進んだ地域であり、まず農村世帯とその資産状況に関する詳細な研究成果が紹介される。次に、病院に関する研究で業績のあるルチア・サンドリによる、サン・ジミニャーノのサンタ・マリア・デッラ・スカーラ病院の乳母契約の事例が引用され、分益小作人の家族にも様々な経済レベルがあるも

の慢性的に負債が存在し、乳母としての俸給が小作人世帯にとって見過ごすことのできないものであったことが示される。小作人の負債者はたいていの場合その領主である都市民である。つまり通常の地代や税の支払い、農作業に必要な物品購入のための借金といった貸借関係に加え、乳母業もまた都市民と小作人を繋ぐ経済的紐帯のひとつであり、小作人にとって乳母業は、慈善行為とは意識されなかったのである。都市に奉仕する慈善施設の活動を支えていたのは、都市と農村の間に存在した既存の経済的従属関係であったとするサンドリの指摘は、都市と農村との関係を考察する他分野の社会史研究者にとっても有効なものであろう。彼女の見解を支持しつつ、領主である都市民と農民との間に存在したこうした価値観の差異の性格をさらに明確にするため、著者は文学史料であるノヴェッラを用いた分析を第五節で行っている。ノヴェッラとは、一四世紀から一六世紀にかけてイタリアの都市民の間で語られた小話であり、そこから著者は都市民の農民観や、こどもの里親としての農民評価を探り、経済的従属関係から生み出される相互の不信感や、農民の側から見た都市民の慈善を炙り出している。

他の章に比べ使用される史料が断片的で解釈にも単純化の傾向がみられるが、農村地域を対象にした場合これはやむをえないことかもしれない。むしろここでは、第五節の、文学作品を用いて農民の慣習や領主との貸借関係の中身を浮かび上がらせた著者の手法に注目したい。他章では捨児養育院の史料から作成した統計資料がふんだんかつ効果的に盛り込まれ、捨児たちの動向が数量的に示されている。しかし、統計からは見落とされがちな心性に

目を向けるならば、文学作品もまた積極的に活用されるべき史料であり、本書のテーマにとって重要な一節であると思われる。都市民である領主に対して「不誠実な」農民像というのが、文学作品の中に現れるステレオタイプ化された表現であるにせよ、都市民と小作人との間の価値観や習慣の相違、また、捨児の養育を託す農民に対する都市民の不信などを窺わせ、都市の慈善がこうしたアンバランスな心性のうえに立脚して行われていたことを炙り出した点が興味深い。

第五章 養育院のこどもたち

本章では再びインノチェンティ捨児院養育院の考察に戻り、この施設に収容されたこどもの待遇、そして成長後の生活について考察されている。第二章において著者は、この施設が経済的に困窮した母親が一時的にこどもを預ける場としても機能しており、社会的に無用なこどもを閉じ込める場ではないことを示唆していた。本章は、中世末期から近世にかけて出現する救貧施設の性格を「閉じ込め」にあるとしたボスウェルのテーゼに対するさらなる反論であり、成長したこどもたちが同施設によって社会にいかを送り出され、彼らの自立への援助がなされたかについての分析がなされる。『寛書』と『日誌』と題された史料も本章では併せて使用され、こどもたちは通常六才から七才で、養親に「譲渡」というかたちで奉公させていたこと、男児には読み書きの教育、女児には嫁資をつけて結婚させる努力がなされていたことが明らかにされていく。もちろん養親にとっては捨児を引き取ることは一種の慈善に類する行為であったため、「譲渡」が成功するとは

限らず、男児も女児も養育院へ戻ってくる事例が少なからずあったが、男児の職の需要や、女児の嫁資の相場など、現実の社会状況を考慮した木目の細かい養育院側の配慮には驚くべきものがある。こどもの入所時、譲渡時、また養育院へ戻ってきたときの状況などが史料には記述されており、職員のコどもに対する関心の高さは、アリエスのこども期に関するテーゼの反証としても十分有効なものであろう。

しかしこうしたこども観はどのようにして醸成されたものなのだろうか。第一章において、こどもへの関心の高まりを示すいくつかの根拠が挙げられているが、一五世紀にこうした非常に現実的な処置がとられた背景には、著者自身もむすびにおいて触れている通り、大黒死病流行後以降の人口回復を望む都市支配者層の意識が当然作用していたと考えられる。とはいえ、一五世紀に特徴的な慈善観をさらに明確にするには、ペスト大流行期以前の比較、あるいは人口が一定の回復を果たした一六世紀の社会において再編される捨児施設との比較、そして当時の宗教観との比較が必要であり、これはもはや本書の射程を超えた要求であらう。

むすびにおいて著者は、ボスウェルの主張する中世末期の捨児施設像に対し、一定の留保をつける。捨児養育院とは、遺棄されたこどもたちを不衛生な環境の中に閉じ込め、死に至らしめるだけであったとするボスウェルの主張は、人口が増加し、捨児に対して規制と矯正が求められるようになる対抗宗教改革期以降の施

設に対して該当するものであり、彼の分析が緻密さを欠くという著者の主張には納得できる。また都市民固有の慈善観を、農民との対照やジェンダー観から切り取った本書の手法は刺激的であった。中・下層民が有していた価値観、あるいは慈善を施される側の価値観を明らかにすることは容易なことではなく、これをここまで提示できたのは著者による長年の史料分析の成果であらう。一五世紀における、都市と農村との間の政治的関係の変化に関し、さらに説明があれば、フィレンツェの都市的慈善の構造をさらに説得的なものとしえたのであろうが、これは今後の農村研究の進展を待つて解決されるべきものかも知れない。また、施設の「世俗化」を問う場合、その時代固有の政治的動向との関連に踏み込むことも必要だったのではないだろうか。一五世紀以降に顕著となる施設の再編や新設は、各都市の政治体制に強く規定されている。中世末期から近世という時代における慈善施設を扱う限り、この問題は無視し得ないものではないだろうか。

中世末期の慈善施設に関して今日まで明らかにされていることは、驚くほど少ないのが現状であり、丹念な史料分析を経て執筆された本書からは、実に貴重かつ多岐に渡る知見を得ることができる。本書には、慈善と貧困という問題に関心をもつわが国の研究者にとって、研究を進めるべき指針と可能性が示されているのである。

(A5判 三三〇頁 二〇〇〇年四月 名古屋大学出版会 四八〇〇円)